

---

# GOTH 2

水野 咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

G O T H 2

### 【Nコード】

N 6 8 1 3 F

### 【作者名】

水野 咲

### 【あらすじ】

三連休を目前に控えた木曜日、とある廃ビルで死体を見つけた「僕」は、現場でクラスメイトの神山桜と出会う。それは「僕」が、何気ない日常から足を踏み外した瞬間だった。乙一先生著「G O T H リストカット事件」の二次創作。

## 1（前書き）

どうも、水野です。

少なめですが残酷描写ありなので、グロ耐性のない方はご注意ください。

副題をつけるなら、「胸像 hungry man」ですかね。

三連休を目前に控えた木曜の夕方、僕は電車を乗り継ぎ、隣県の町に来ていた。今日で始めてからちょうど一週間になるこの街の散策は、近頃僕のささやかな趣味の一つとなり、スポットでハンカチに水を垂らすように、退屈な日々にならずにばかりの潤いを与えていた。

駅から然程離れていない繁華街の一角で足を止め、夕暮れの中で次々と光を灯していく街を眺めると、この限られた地域にも多くの人間が居ることがわかる。僕は自然と、淡いグレースィョンに染まりながら流れていく人ごみを避け、暗い海の底を泳ぎ回る深海魚のように、自分のあるべき場所を求めて再び足を動かしていた。

泳ぎ疲れて光の届かない下界へと沈み行く哀れな魚は、今日もこの街のどこかを彷徨<sup>さまよ</sup>っているはずだった。

路地裏と大通りを何度か行き来した後、僕は腕時計に視線を落とした。時計の針がもう家に帰らなければいけない時間を示していた。この春高校に進学してからというものの、僕が帰宅する時間はそれほど遅いものではなかった。塾や部活には所属していないため、この散策に行く際には、両親や姉にはクラスメイトと遊びに行くという理由をつけ、外出するようにしていた。学校生活を円滑にする為に最低限の付き合いはしてきたし、成績にも気を使っていたため、今回のように時間を取るのには難しいことではなく、誤解や疑いを持たれることもなかった。

しかし、帰宅時間が遅くなればそういった信頼を損なうかも知れず、それはあまり好ましいことではなかった。

僕は踵<sup>かか</sup>を返し、一転して駅へと向かった。

それを見たのは、僕が駅への最短距離を行こうと脇道に逸れた時だった。

それは何の変哲もないテナントビルで、くすんだ白の外壁や、日焼けした看板の跡、薄汚れたテナント募集の張り紙などから、今現在には使われていない物なのだろうということが見て取れた。

僕は正面の扉に近づき、古ぼけたビルの外観を見るともなしに見ていた。

午後から断続的に降り始めていた小雨は、今やはつきりとその冷たさを感じるほどになっていた。僕は、少しばかり雨宿りが必要だと思った。

扉に手を掛け、少し考えた。

この廃れたビルに新しい鍵を付けようとする人間は、はたしてどれだけいるのだろうか、と。

思いのほかすんなりと入ることのできたビルの内部では、空気が淀み、薄闇の中でうず高く積もった瓦礫<sup>がれき</sup>が毛羽立った絨毯を覆っていた。細かく散ったガラスを踏まないように、僕は目を凝らしながら奥へと慎重に進んだ。

僕は、自然と早くなっていく鼓動を抑えるように、深く息を吐いた。まるで頭と体が切り離されたように、僕の体は、ゆっくりと、確実に奥へと歩んでいった。

やがて目の前にドアが現れ、開いた隙間から差し込んだ一条の光が僕を包み込んだ。隣のカラオケボックスのネオンが入り込んだのだろうか、僕の手や足は様々な色へと変わっていった。

少し力を入れると、そのドアは金属特有の耳障りな甲高い音を立てながらゆっくりと開いた。

室内は薄暗かったが、時折天井近くの窓から入り込んでくる色とりどりの光によって、何があるのかはぼんやりと見て取ることがで

きた。

部屋は教室を半分にしたくらいの大きさで、大小さまざまなダンボールとそこからはみ出たコードの束、スプレーで壁面に描かれた難解な文字が全てを覆っていた。床は絨毯からリノリウムへと変わり、所々穴の開いたそれは、黒く染みのできたコンクリートの下地を晒さらしていた。

そしてネオンが数回瞬またたいた時、僕はようやく部屋の中央にうずくまった人影に気付くことができた。

靴に張り付いた床の一部が音を立てて剥がれると、人影はそれに反応して震えた。こちらを振り返ることなく地面に座り込んだままのその姿は、いつか姉と共に見たホラー映画に出てくる少女の幽霊を彷彿とさせた。劇中では、少女が振り返った瞬間に主人公が闇へと引きずり込まれていったのだが、現実では医療シーツのそれと同等か、それ以上に顔面蒼白となった少女が、怯えた目でこちらを見上げてくるだけだった。肩を叩くよりも声を掛けるべきだったのだろうか、と僕が思案に暮れていると、暗闇に浮んだ唇から微かな空気が漏れ出た。

「トウマ君……？」

聞き取ることのできた自分の名前。その響きに、不安げに揺れる瞳の色に、僅かながら記憶の合致があった。

肩まで伸びた髪は、受験前にはもつと短かったのだと彼女は話していた。出不精な家族に代わって学校帰りにいつも買い物をしていうことや、弁当はいつも自分が作っていること、僕のサンドイッチと交換した卵焼きは自分の得意なおかずの一つであること、おかげでいつでも嫁に貰われる準備ができていると父にからかわれたこと。全て、彼女が冗談を交えながら僕に言っつて聞かせたことだった。

休み時間や教室移動の間を縫ぬって話しかけてくる彼女の表情は、誰の目から見ても明るく生き生きとしていて、整った外見も相まり、異性から言い寄られることも少なくないようだった。

しかし、今の彼女からは全く生気が感じられず、虚ろな目は焦点

が合っているのかいないのか、しばらく待ち続けていても反応はなかった。

「神山さん」

僕は、ちゃんとクラスメイトとしての仮面かおをしていたのだろうか。僕がいつも呼ぶ名前を口にする、暗い中でも彼女の頬にいくらか色が戻っていくのが見えた。震える指先が僕の袖口を捉え、屈んだ僕の体は彼女に引き寄せられた。

わずかに開いた唇は、しかし声を発することはなく、彼女はそのまま僕に体重を預けてきた。

「誰だい？」

こういった場合はどこに捨て置くべきだろうか、と頭の中に近隣の山々を浮かべていた僕の背中に、突如声が掛けられた。振り向くと、スーツ姿の男性が入り口からこちらを伺っていた。僕が彼女の知り合いであることを話すと、彼は納得したように頷き、脇に抱えていた毛布を神山さんへと掛けた。

「隣の部屋を探してみてもこんな物しかなくてね。僕の上着だけでは寒いだろうし、我慢してもらおうでしょう」

見ると、彼はシャツの袖を捲り、上着は着ていなかった。寒くはないのか、と僕が尋ねたが、彼は黙って首を振るだけだった。

そして、彼は苦い顔を浮かべて部屋の奥を見やった。何かあるのだろうか。僕も彼に倣って前を注視した。

それは、僕が日常という儚くも脆い足場から足を踏み外した瞬間だった。

部屋には、僕と神山さんと彼、そしてもう一人がいた。

うず高く詰まれたダンボールに囲まれ、煌々と輝くネオンにライトアップされた胴体には、肢体が無かった。

切り取られた左の乳房からは赤黒い内部が覗き、ほの白い肋骨が見えた。

滴る血はやせ細った体を伝い、腰があつたはずの場所に小さな池を作っていた。

両足は体の向きとは逆に置かれ、その色はわずかに変色し始めていた。

切り取られた右腕が無造作に転がり、左腕は木材と共に部屋の隅に立てかけられていた。

資材によつて胴体に串刺しとなつたその女性の顔は、口の端から流れ出た血を拭うことも叶わず、引き攣つたままの笑みを浮かべていた。

時折地面を打つ彼女の血が、二人の沈黙を飲み込んでいた。

僕は息をするのも忘れ、ただそこにある死の力タチを見つめていた。

## 1（後書き）

お久しぶりです。水野です。

お読みいただきありがとうございます。

今回は乙一先生の『GOTH リストカット事件』二次創作にチャレンジしてみました。

キャラはオリジナルと原作を混ぜています。

安直に「GOTH “2”」なんてタイトルを決めてしまいましたが、続編なんて大層なものではないのであしからず。

どうでしょう、原作の淡々とした表現を真似てみましたが、できているでしょうか？

ラフ原稿は上がっていますので「そらいろアンサンプル」のように詰まることはないと思いますが、再チェック、再々チェックと踏まえてからの投稿になりますので、次は一週間後ぐらいになると思います。

尚、原作の雰囲気壊さないよう恋愛描写は出来る限り削っていますが、途中で「お前これはやりすぎだろう」なんていう表現がありましたら注意をお願いします（笑）

「そらいろアンサンプル」の更新につきましては、一度削除してか

ら再投稿しようと思っています。現在プロットから見直し、前回の  
無茶ぶりを反省しつつ書き直しています。

では、また。

水野でした。

## 2 (前書き)

続きです。  
グロ注意。

12/28

追加・修正しました。

一月前、僕は朝のニュースである事件を知った。それは、隣県のN市にある街で起きた事件だった。

警察署の前でレポーターが早口に事件の詳細を伝えていた。少女のものらしき遺体が立体駐車場の一角で発見されたこと、遺体の欠損が激しく、現場に残された毛髪や骨格からおおよその年齢と性別を判断したこと。肩口から両腕が切断され、腰から先も、鋸のこぎりのような刃物で分離されていた。かろうじて残されていた頭部も、顎あごから先を失っており、他の部位も発見できず、どこかに遺棄された可能性もあるらしかった。

顔をしかめ、すぐに僕の手からリモコンを取ってチャンネルを変えようとすると姉とは反対に、僕はこの異常な事件に対し、尊敬にも似た感情を憶えていた。

僕は、死と言うものに対し、純然たる興味を持っている。そして、その永遠の終結をもたらす人や物事には、それ以上に関心があった。僕の中で渦巻くこのほの暗い感情もあり、僕は常人では当たり前である死への恐怖というものを持ち合わせてはいないらしい。それに気付いたのは、僕が小学校に上がり、二度目の夏休みを終えた頃だった。

新学期、僕が宿題として担任に提出したのは、絵日記だった。それは、近所の空き地で見かけた猫の屍骸しかいが時と共に変化していく様子を一日おきに記した、観察記録だった。日記の中で、その猫は赤黒い肉塊から褐色に変化し、骨の隙間から青紫色の内部を覗かせてやがて黒く濁った液体が漏れ、土に還っていく。中身の抜け落ちた眼窩がんかは、当時の拙い画力でもはつきりと判るように黒々と塗り潰されていた。その次の日から、年老いた女性教諭は、僕に何度となく生物に関する本を薦めたり、「生き物を大切に」と繰り返し説いたりした。そんな彼女に辟易へきえきした僕は、飼育委員会に入り、周囲の生

徒と同様に振舞うことで、彼女の信用を得ることを思いついた。僕は毎日のように職員室と飼育場を往復し、彼女の動物愛護の精神とやらを聞き、異臭のする鶏小屋とウサギ小屋の清掃をすることにした。彼女はそれを大いに喜んでいたようだった。

定年退職で学校を離れることとなった彼女は、「あなたは立派になった」と涙で目を腫らしながら僕に別れを告げ、去っていった。僕はその足で、委員会の脱会手続きの用紙を手に職員室へと向かった。

僕の「死」への執着は変わらず、実際にあった事件や事故の記事をスクラップしたり、昔の処刑道具の知識を得たりすることで、渴いた欲望を潤していた。

今回の事件を知ったことで、自然と足は現場へと向かっていたし、手はキーボードに被害者の名前を打ち込み、耳はテレビから流れてくるニュースを拾い、目はインターネットに落ちた情報を探していた。

結果、僕は周囲の誰よりも詳しい情報を知っていた。

元来、連続殺人者<sup>シリアルキラー</sup>は被害者選の選定に外見的特徴を考慮することが多いのだと言う。それは、大まかであれば長い髪の女性であったり、細かなものでは八重歯の形であったりと、実に様々だ。

その点、今回の連続殺人には死体の外傷と性別以外に共通点はない。住んでいる地域は別々、年代も十代と二十代、職種も別々だった。

当日の服装は遺体が全裸であることから、目撃証言からの推察でしかなく、大した判断材料になるものでもなかった。

だから僕は、彼女らの外見ではなく、遺体が発見された期間と時間とに注目していた。

最初の事件が発覚したのは一ヶ月前、そして第二の被害者はそのわずか一週間後に発見されている。これは数ある連続殺人の中でも、異例の早さだった。

通常、連続殺人の第二の被害者は、やや間隔を置いてから殺人犯に狙われる。自身の犯行が、社会やメディア、特に警察のような捜査機関にどのような影響を与えているかを確認するためだ。その反応が自身にとって都合の良い物であれば犯行は大胆になり、都合が悪ければ次の殺人は自ずと自粛せざるを得ない。

しかし、現に殺人は起きているし、僕には犯人が初めての殺人に躊躇とまどいを感じているようには見えなかった。

そこで考えられる可能性は二つあった。

一つ目は

・これが初めての犯行ではなく、手口を変えて犯行に及んだのが今回の一連の事件

犯人は、何か犯罪行為 軽いものから重いものまで 一度手を染め、それが明るみにならなかったことから味をしめ、次第に大胆な犯行へと及ぶようになったのかも知れない。

しかし、この手の犯人は慎重さよりも欲望の方が勝り、自然と情報を現場に残してしまうことが多い。

二つ目は

・自身の欲望を抑えられず、警察の捜査に注意しながら犯行に及んだ

という可能性だった。

僕は、この可能性が一番高いのではないだろうか、と思っていた。犯行そのものは大胆でも、犯人自身の弱味は少しどころか一度も見せていない。第一の被害者が発見された立体駐車場や第二の被害者が捨て置かれたボウリング場が、近所にできた二十四時間の駐車場に客を取られたり、経営不振などであり多くの人が寄り付かない場所であったことから分かるように、おそらく犯行現場は念入りに調べられ、被害者の選別も一定のルール下に置きながら無作為性を持たせている。そんな犯人がまだほとぼりの冷め切らないうちに犯行に及ぶ場合はただ一つ、慎重に被害者を選定していくのが良いと知りながら、自身の中にある欲望に耐え切ることができなかった

のだ。そして、やむなく計画を前倒しにしてまで被害者を切り刻むことを望んだ。

溢れる殺人への衝動を抑えることができなかったありし日のテッドバンディのように。

ここでの留意点は、第三者にとっては被害者の判別が難しいことと、犯行現場が前もって犯人によって決定されている可能性が高いということだ。

もちろん犯人が警察の追及を看過するほど知能が劣っている可能性もあり得るが、少なくとも犯人は意図的に証拠を消しているのだから、知能は低くはないと僕は結論付けた。

僕は、どうにかして犯人の仕上げた後の現場に警察よりも早く辿り着きたいと思った。

それは決して通報したり事件の解決を望むということを意味するのではなく、現場を見ることで犯人の頭の中を覗きこむような、知的好奇心から出た想いだった。

犯人の動きを予測することはできないだろうか。僕はそう考え、隣県の情報を片っ端から漁っていった。

狙いは、犯人が被害者を選ぶ場所だった。

もし僕が犯人であるなら、選択の幅は、広ければ広いほど良いだろう。つまり、人が多く集まる場所である必要がある。それは、おそらく大勢の中から自分好みの異性を探し出すのと似ている。連続<sup>シリ</sup>殺人者<sup>アルキラー</sup>にとって被害者とは、言わば恋人に近い存在だからだ。

そして、条件はもう一つ。世間から隔離された建物が近くにあることだった。僕なら、誰にも邪魔されることのない場所で、ゆっくりと被害者達の肌にナイフを喰い込ませ、救われることのない叫びと恐怖と臓腑とを引きずり出していきたい。

理想的な環境を言えば、犯行直後に誰かが立ち入り、僕が残した被害者を発見し、かつ犯人である僕は誰の目にも留まることなく立ち去ることのできる場所が良い。

僕は、探し続けた。

そうして三連休を目前に控えた前の週、僕はある情報を目にした。それは、県境にあるS市で大型ショッピングモールがオープンする、という広告だった。

何気なく手にし、一度は丸めてくずカゴへと投げ入れた後、僕はそれを再び拾い上げた。

ずれた眼鏡を指先で押し上げた時には、既に僕の中である考えが浮んでいた。

## 2（後書き）

少し忙しくなりそうなので、先にUPしておきます。  
これです

第二部分はこれで終わり、第三部分へと繋がっていきますが、追加修正の場合は次の投稿の前書きに書いておきますので、第三部の本文を読む前にそちらを御覧になってからのほうが良いかもしれません。

原作と雰囲気을似せて書いてますが、登場人物以外で何かおかしい所があればじゃんじゃん言ってください。その都度修正していきます。

自分で書いててなんですが、主人公の教師の扱いが酷いなあ。  
まあ計算高いのは樹君と同じか。

次は可能であれば週明けにUPします。  
ではまた。

追記：

ちょっと忙しいので週末にUPしたいと思います。

追記：

12/28

追加・修正しました。

ようやくUPできました。

お待たせして申し訳ありません。

第二部分はこれにて終了です。

第三部分へと続きます。

来週末にUPできたらしたいと思います。  
ではまた。

### 3（前書き）

第二部分に12/28付で追加修正があります

第三部分です。

いつものようにグロ注意。

腰が抜けたらしい神山さんを背負い、ビルの中で出会ったサラリーマン風の男性に連れられ、僕たちは近くの喫茶店まで来ていた。強まった雨の中を傘もなしに歩いてきたのが良くなかったのか、神山さんの体は震えが止まらず、喫茶店の主人が気を利かせて奥から引つ張り出してきた毛布を巻くことで、いくらか和らいだように見えた。

「彼女、大丈夫だろうか？」

堺田と名乗った男性は、カウンターでコーヒーを注文し、肩越しに振り向いてソファ<sup>うす</sup>に埋まった神山さんを見やった。平気ですよ、と僕は返事をして、主人が業務用の大きなマシンからエスプレッソを抽出していく様子をぼんやりと眺める。カウンターの中は混沌<sup>カオス</sup>と呼ぶに相応しく、乱雑に積み上げられた古雑誌とゴミ袋が狭い通路を更に狭めていた。主人がその小路を慣れた風に通り抜け、棚からはみ出た調理器具を引つ張り出しては作業に戻っていく。どうやら整理整頓の語とは無縁の性格らしい。

そのまま頭の中で暗闇の惨状を反芻していると、ほどなくして僕の目の前に三つのカップが置かれた。どうやらここはセルフサービスのようだった。

カップをトレイに載せて席へ向かうと、丸テーブルをはさんだ向かいに神山さんが座っているのみだった。堺田は、トイレに行ったのだろうか。構わず席に着くことにした僕は、一人用の小さなソファ<sup>ア</sup>に身を預けた。やや柔らかすぎるそれはどうにも心地が悪かったが、浅く腰掛けることで収まりがついた。

薄暗い店内に雨音が響き、それはエスプレッソマシンの重低音を掻き消して僕の耳まで届いていた。神山さんは一言も発することなく、両の手で包み込むように持ち上げたカップの中で茶色の泡と深い黒が渦巻いていくのをじっと見つめていた。僕はそんな彼女の表

情を曇った眼鏡を拭う振りをして観察していたが、ソーサーとカップの擦れ合う音で、ようやくコーヒーがカップの側面を伝って床に染みを作っていることに気が付いた。

主人に布巾を借りてコーヒーの零れた手やコップを拭っている間、彼女は作り物の人形のように微動だにせず、僕に小さく礼を言つて、それきりまた黙ってしまった。

二杯目のコーヒーを手に堺田が戻ってくると、彼はこう言った。

「僕は、これから警察に連絡するよ」

彼は持っていた革のカバンを置いて、ソファアの肘掛に置かれていた上着をそこに載せた。

「これを飲んで、君達はもう帰りなさい。後は、僕がなんとかしてあげるから」

何か困ったことがあつたらここに連絡をするように、と彼は名刺を差し出す。ポケットには神山さんに掛かつていた上着から抜き取った名刺が一枚あつたのだが、もう一枚持っていたも損にはならな idarou、と考えた僕はそれを受け取ることにした。彼が警察に通報するのであれば、僕にとって都合が良い。殺人犯を探していました、と正直に答えるわけにもいかず、かといって嘘をつき通すのも面倒だった。ちらりと見た堺田は、襟元にも糊がかかり、ネクタイは有名ブランド、カフスは銀製の高価なもので、袖やズボンも皺一つなくまっすぐに伸びていた。こういった身なりに気を使う人間は、有言実行のタイプが多い。堺田なら、僕たちが居なかった時の証言もしてくれるだろう、だが。

「堺田さんはどうしてあんな場所に？」

アートディーラー

あの時代錯誤のビルに美術商が何の用があるのだろうか。僕は名刺に書かれた三文字を見つめながら彼に問いかけた。見た目にもそれなりの資金を持つであろう彼が、まさかあそこに画廊ギャラリーを持つだろうか。

「友人が、格安の物件を探しているんだ。どうにかそこで画廊ギャラリーを開きたいと言っていてね。でもまさかあんな」

「あんな物があるとは思わなかった……？」

僕が口を挟むと、彼は頷いて、

「あんな事があるとは、ね」

そう呟いた。

それから彼は代金を払うという僕の申し出を押し切り、主人への支払いを済ませると雨の中店を出て行った。

「いつも、こうなの」

神山さんが口を開いたのは、僕が二杯目のコーヒーを口にしていた時だった。吐き出すように言葉を紡ぐ彼女の顔色は、死人のそれに近かった。

「小さい頃から、何故か、その……死んだ動物だとか、そういうものを見つけてしまうの」

おそらく先ほどの遺体を思い出したのだろう。細い眉を寄せて、死体については直接言及せずに、ぼかしを入れて話し始めた。

小学生の頃、彼女は湖で水死体を発見したらしい。遠足で迷子になった彼女が見たという、水面に浮んだ死体を僕は想像してみた。体内に溜まったガスでぷつくりと膨らんだ表皮に張り巡らされた毛細血管の紫、水と臓物から出た肉汁に染まり溶け出した肌の白さ、腐り始めて濃緑に染まった下腹部、そして、その光景を見て立ち尽くす幼き神山桜の赤い靴。

水死体<sup>それ</sup>を皮切りとして、彼女は年を重ねるごとに数々の死体を目にしてきたらしい。海で発見した男性の死体だったり、合宿中に出てきた頭蓋骨であったり、近頃では犬の死骸が幾重にも折り重なった様相を目にしたのだという。それらは、いずれも彼女が一人で居る時に発見したものだだった。

「兄さんや友達に迷惑を掛けて、今度はトウマ君にまで」

そう言葉を切つて、彼女は顔を伏せた。

僕のような破綻者<sup>サイコパス</sup>にしてみればこれほど羨ましい才はないのだが、やはり常人の感覚では忌むべきものなのかもしれない。神山さんの肩が震え、頬を涙が伝うのが見えた。

あまり憶えていないが、僕は彼女に、君のせいじゃない、君は悪くない、というような慰めの言葉を掛けたと思う。僕の嫌いな綺麗事の限りだったが、とにかく、僕が何事か話していると彼女は泣き止み、最後には薄く笑顔さえ浮かべた。

僕はほぼ無意識にそれらのことをやってのけ、気付いた時には喫茶店の外に居た。それは決して厚意からなどではないことは確かだったが、はつきりとした理由はついに思いつかなかった。

財布をポケットにしまい、僕と神山さんは二人で彼女の兄を待つことにした。彼女はどこかに携帯電話を置き忘れ、僕は最初からそのような便利なものは持っていなかったので、主人に電話を借り、彼女が迎えに来てもらうように連絡したのだ。

幸い彼女の兄はすぐ近くに居ることが分かり、僕たちが雨宿りを始めてからすぐに彼は来た。彼女の名を呼ぶ声に顔を上げると、そこには端正な顔立ちをした好青年が立っていた。

黒っぽい私服を着込んだ彼は、爽やかな笑顔を僕に向けると、「君があのとウマ君か。いつも話は聞いているよ。今日はありがとな」そう言っ僕をじっと見つめてくる。

こげ茶の瞳に全てを見透かされているような心地の悪さを感じ、引つかかるものを感じながらも、僕はいつもの仮面を被ることにした。神山桜の、クラスメートとしての仮面だ。

切れ長の目を見つめ返し、僕は何もしてませんよ、と意識して唇の端を持ち上げる。

「もう、兄さんっ、トウマ君に変な事言わないで！」

神山さんが彼　神山樹いづきと名乗った　の背を押しながら振り返り、またね、と手を振る。僕はそれに応じ、後姿が見えなくなったところで背を向けた。

現場には、もう警察が居るのだろうか。だとしたら、現場検証はもう始まっているだろう。彼らはアレ、いやあの作品に対してどんな反応を示すのだろうか。

興味は尽きることなく、僕の頭の中を埋めていく。僕の足は自然

と速くなっていた。  
遠くからサイレンの音が聞こえた。

### 3（後書き）

どうも、水野です。

第三部分はこれで終わり、いよいよクライマックスに近づいてきました。

どうでしょうか。原作の雰囲気出てます？

気を付けてはいますが、ものすごい不安なんで、違ったら違ったでズバズバ言っちゃってください。

やつと樹君が出てきましたね。でも今回は出番コレだけなんです。ごめんね、いっちゃん（誰

「僕」バージヨンじゃなく「俺」バージヨンで書いておきました。家族の前ならこんな感じなのかなあ、とイメージしながら。

読み返してみたらあんまりグロくないですね。15禁じゃなくてもよかったかな？と思う今日この頃。

次の更新は来週末になると思います。  
ということ、皆さん死体には気をつけましょう。  
では、また。  
水野でした。

#### 4 (前書き)

いつものようにグロ注意です。

今回は書き過ぎた感が否めなです。。。

翌日、神山さんは休まずに学校へ顔を出していた。

僕と彼女は、今朝挨拶を交わしてから一度も口をきくことなく過ごしていた。僕はいつものように周りを囲むクラスメイト達の聞き役に徹していたし、彼女は昨日の事件が未だ尾を引いているようで僕に近づいても声を掛けるのを躊躇っている様子だった。教師が板書を終えるのを待ってノートを取る手を止めている時や、友人達に囲まれ話題の中心から外れた時、彼女の表情に翳<sup>かお</sup>りが見えたのを、僕は見逃さなかった。

その細微な表情の差異に気付いた人間は、おそらく僕以外にはいなかった。その理由を知る者も、僕ただ一人だった。

行動を起こすなら、早い方が良いかもしれない。そう、僕は思った。

移動教室の時に、僕は彼女が数人の女子と歩いていたところで声を掛けた。彼女はいつも誰かと喋っていたので、この時を逃しては彼女がバレー部の練習を終えるまで声を掛けることは出来ずにいただろう。

幾人かのクラスメイト達が振り返って様子を窺<sup>うかが</sup>う中、僕は彼女にこう切り出した。

「一緒にシヨッピングモールに行かない？」

手持ち無沙汰な様子でスカートの端を握ったり放したりしていた彼女の指が、その動きを止めた。

少女に姿を見られたわけではない。なら、なぜ自分は今、目の前に居る彼女を殺そうとしているのだろう。

男は、鉄製の椅子に拘束された少女を見下ろし、自問していた。鼓動は痛いくらいに耳に響き、しかし思考はそれとは反対にゆつく

りと沈んでいく。水の抵抗の中を歩いているような感覚はもどかくもあつたが、この波に一度身を許してしまえば、待っているのは破滅のみであることも知っていた。

だから、彼は考える。

なぜ、殺す？

時折くぐもった声を漏らす少女の筋の通った鼻梁びりょうにアイマスクを掛け、腕や脚に絡まった革のベルトを一つずつしつかりと締め上げていく。コンクリートの床に打ち付けられた椅子は、今や一人の人間の命を支えていた。その重みを受け止めて尚、それは揺らぐことなく鎮座している。

彼は、身体の奥底にある暗い欲望の塊が歓喜に震えるのを感じた。人間を物として扱う圧倒的な支配は、彼を酔わせるには十分な刺激だった。彼女の白く透き通った頬も、鬱血うっけつし始めた細い腕も、丸みを帯びた陶器のような腰も、だらりと力なく開かれた脚も、全てが彼の意のままだった。

性欲が無いわけではない。

しかし、それに勝るものが彼の中にあることを、誰よりも彼自身がよく知っていた。

家出同然の少女を匿かくまい、朝起きた時には彼女の首が浴槽に転がっていた。義父を毛嫌いしていた彼女が、斬りつけた途端に家に帰りたいと泣き叫ぶのは滑稽だった。道を尋ねに来た若い男は、脚の腱けんを切り、両手を失って気絶したところを海に投げ捨てた。傷口を焼いている間、彼がなぜ謝り続けていたのかはついに分からなかった。店の前をうろついていた老人を殴打し、家に連れて帰り可能な限りに解体したこともあつた。

ナイフが肌を突き抜け、肉を掻き分けると、えもいわれぬ快感が生まれるのを感じた。それは血潮のように温かく全身に行き渡り、

充足感に心が満たされていくのだ。

やがて凶器がナイフから電動の丸鋸まるのこに替わると、腕や脚を切断することに熱中するようになった。四肢を奪われた犠牲者達は、なすすべも無く腰を分断され、失血して死ぬか、気を失った。床に転がる彼女たちを見下ろす時、彼の心は躍った。首は、無い方が美しく見えたからそうした。

そして、今日は彼女が犠牲になる番だった。

取り付けた幾つかの丸鋸を椅子のスリットにあてがい、それぞれ遠隔操作できるように有線式のリモコンを繋げた。今日は趣向を変え、俗に言う殺人映像スナッフフィルムを撮影してみようと思っていた。冷酷に切り刻まれていく彼女の姿を想像しただけで、気持ちが逸るのを感じた。先日購入したばかりのビデオカメラをセットし、三脚を少し離れた場所に取り付ける。顔を覆っていたアイマスクを外し、もう一度ベルトが外れていないか確認して、カメラの電源を入れた。

柱に立て掛けられた姿見の奥に人影を見たのは、ボタンを押し込む寸前だった。

かつてない程に念を入れたのは、今回が僕にとって初めての出来事であることと、一つのミスが命取りになり得たことからだった。この数日間、僕は一度会っただけの彼はを嵌める為だけにいくつかの策を講じた。

そして、それらが彼が犯人であることの確証を得るだけの材料になったことを、僕は今知った。

「堺田さん、あなたでしたか」

早鐘のように脈が加速していくのを感じながらも、僕の声は震えもせず、極めて平坦だった。柱の影から出て、ゆっくりと歩を進めてレインコートを着た堺田の隣に並んだ。

彼は、否定しなかった。

否定しなかったが、肯定もしなかった。彼は沈黙を保ち、下着姿で椅子に座った神山さんを凝視していた。

傍らに畳まれて重ねられた服は、おそらくは彼女のものなのだろう。

両手をだらりと下げて振り返る彼の気配を感じ、僕は顔だけを横に向けた。濁った瞳が、僕の目を捉えていた。

「なぜ、ここに？」

力の抜け落ちた指は開き、手に持っていた薄いカードのようなものは床を打ち、反響音を立てた。それを拾い上げ、僕は一步前へと進んだ。背中に強い視線を感じた。

「現場には真新しい鍵がついていました」

新しいテナントも入らないであろうあの古びたビルに鍵を掛けるのは、オーナーが犯人かの二択だった。犯人であれば少なくとも二度訪れていることになり、それは事前に下調べされていたのである。う他の現場とも共通していた。

それは、言い換えてみれば犯人に都合の良い場所を探していたということであり、逆手にとってしまうえば、犯人の次の犯行現場を予測する鍵にもなった。地域を限定してしまえば、条件に見合う場所は数が限られてしまうのだから。

つまりそれは、僕に都合の良い場所を犯人に提供することだった。

「ここで、一つ問題がありました」

椅子に近づいていき、神山さんの腕を固定していたベルトの一つに手をかけた。

現場を特定することは可能であっても、肝心の被害者となる条件は分からなかった。メディアに出てくる情報は多いが、そのどれが条件に該当するのかは判別が難しかったのだ。このままでは、僕は犯人に出会うことはできなかっただろう。

「しかし、僕は『保険』を掛けていました」

僕は、喫茶店で彼から名刺を受け取る以前に、神山さんの羽織っていた彼のスーツから名刺をもう二枚抜き取っていた。僕はそのうちの一枚を現場の床に残し、もう一枚は自分のポケットに仕舞っていた。

犯人がそれを再び現場に戻って目にする可能性は五分。彼が犯人であるのに限らず、犯人なら、その名刺を残した人物に目が行くだろう。そして、その人物を次の標的にする確率は、決して低くはないはずだ。そう、僕は踏んだ。

「けれど、それじゃあもしも僕が犯人じゃなかった時はどうしていったんだい？」

振り返った僕に、堺田は唇の端を軽く持ち上げて見せた。白く光る彼の歯と唇は、唾液によって怪しく光っていた。

少し苦しくなっていた呼吸に気付き、僕はそこで初めて自分が彼を前にして興奮していたのだと自覚した。

僕は彼に気取られないよう後ろ手に脈を計り、それが落ち着いていくまで待つことにした。

彼が何度も荒く息を吐くのを見つめながら、僕は脳に酸素を送り込むように、深く息を吸った。いつも以上に饒舌じょうぜつになっていた自分を捨て去り、僕は極めて平静に説明を始めた。

「気付いたのは、シャツの皺しわです」

怪訝な顔をした堺田を尻目に、僕は勢い良くベルトのピンを穴から抜き、神山さんの左腕を解放した。

喫茶店のやり取りの後から、僕は何か違和感を感じていた。それは本当に些細な違いであり、ふとした瞬間に忘れてしまうような、微かなものだった。

それが何だったのか気付いたのは、仕事から帰ってきた父を迎え、皆で夕食をとろうという時だった。

出掛けにはアイロン掛けしてあったワイシャツが、その時には至る所に皺ができていた。それは腕の辺りに多く見られ、父が腕捲り

して仕事をしていたのだろうということが見て取れた。

血の滴るステーキの一片は姉に奪われてしまったが、おかげで溜飲が下がることとなった。そう、代償としては遥かに軽いものだった。

僕は満足そうに笑顔を浮かべる姉に気付かない振りをしながら、僕はある仮説を思いついていた。

殺人現場を見た時、僕はそれが今までの事件に関する情報と食い違っていることに気が付いた。

警察や新聞を主としたメディアに流れていた情報には、遺体が「激しく欠損」し、残りの部分が「行方不明」である、とあった。しかし、実際の現場には腰部を含めた全ての部分が揃っていた。

殺人様式の違いは、いくつかの可能性を示す。

- ・模倣犯のように、犯人が違う
- ・犯人の趣向が変わった

これらの可能性は、ニュースを見た時点で消えていた。報道では、前回と同様遺体の欠損部分は「見つかっていない」とされていたからだ。

そして、最後に可能性の一つが残った。

- ・犯行時に問題があった

僕は、犯人が何らかの理由で犯行を中断せざるを得ない状況になったのではないかと推測した。例えば、部外者の侵入などが挙げられるだろう。そして、その場合に犯人が取る行動を想像してみた。まず犯人は、自己保身を最優先とするだろう。手袋をしていない場合は指紋を拭き取ったり、目撃者が居る場合は口封じをしたりするだろう。自身に犯行の証拠がある場合、それを破棄するかもしれない。

そこでもう一度、僕は喫茶店でのやり取りを思い出す。まず最初に、堺田はコーヒーを注文し、そして姿を消した。僕が神山さんと待ち、しばらくしてから彼は帰ってきた。

空白の時間を、彼は何に使っていたのだろうか。

その答えは、おそらくは彼の着ていたシャツにあったのだろう。彼が喫茶店を出る前、彼のシャツは腕が捲られていなかった。それどころか、捲れた袖を戻した時にあるはずの皺さえ消えていた。

それは彼が違うシャツを着ていたことに他ならないし、つまりは着替える必要が彼にはあった、ということだった。

それは時間が無かった場合の犯人の行動と重なり、僕は考えを進めていった。

例えば、シャツが他人に見られてはまずい物だったとしたら？

例えば、シャツの袖になにかが染み付いていたとしたら？

例えば、それが何かの薬品だとしたら？

あるいはそれが、彼のものではない血液だったとしたら？

「だから僕は、これがそんなに悪い賭けだとは思っていませんでした」

犯人がある程度の美意識と統一性の下で殺人を行っていたなら、犯人は不完全な犠牲者が他人の目に触れることを良しとしないだろう。そして現場に戻り、名刺に気付くかもしれない。

今までの事件から犯人の計画性は見て取れたし、被害者に関する遺留品も残していなかったことから、現場を再度確認していただろうことも推測できた。もし彼が犯人でないとしても、名刺を拾うのは犯人が警察だった。犯人であるなら目撃者がいると分かった時点で名刺以外に現場を改変することを良しとしないだろうし、彼自身が犯人であるなら僕たちが現場を見たという証言をすることを恐れ、やはり改変はしないだろう。警察が拾ったのなら、第一発見者が重要参考人として彼を扱うだけだっただろう。

そして、彼が犯人である場合、どうして現場に彼の名刺が残っていたのかを疑問に思うだろう。そうすれば、上着を貸していた神山

桜という少女に目が行くのは必至だった。

学校で彼女を誘う前、僕は彼に一本の電話を入れていた。彼女を元氣付けるためにはどうしたらいいか、という相談だった。実際には彼の口から「どこかに連れ出す」というキーワードを導き出すためのものであり、行き着く答えは僕の用意していた公園での待ち合わせだった。「彼女が事件のことについて何か言いあぐねている」と言い添えようかとも思っただけだったが、どうやらその必要はなかったのだらうと今の彼を見て思った。

公園は犯人に関する手がかりを得る為の散策の途中で見つけた人気の無い場所であり、密会には丁度良い場所とも言えた。

同様に散策で見つけたこの廃工場も、取り壊し工事を来月に控えた物件であり、周囲に音の響かない好条件な現場候補だった。

全ての縛めを解き、神山さんは自由となった。僕は彼女が起きないよう注意しながら、彼女の首と腰を両腕で抱え、服と共に柱の影に横たえた。

「気付いていましたか？　僕が死体について話した時、あなたはおそらく無意識のうちに言葉を言い換えていました」

彼はいびつな笑顔を作った。大事な作品だからね、と呟いたのを僕は聞き逃さなかった。

僕が喫茶店で現場の話をしている時、「あんな物」と言った僕に「あんな事」と彼は返していた。わざわざ言い直すだけのものが、彼の中にはあったのだらう。

「最後に、一つだけ、いいかな？」

互いに向き合う形で、僕達は視線を交わした。彼の瞳から濁ったものが抜け落ちたような気がした。

「君は、好意から彼女を助けたのかい？」

僕は少し考えた後、首を振った。これは、断じてそんな気持ちで

はないことは分かっている。この感情は、いつかあなたには理解できたかもしれない。

「……そうかい」

彼は目を閉じ、まるで眠りについたかのように安らかな笑顔を浮かべた。少しの未練も見せずに、彼はその時を自ら止めることを選んだ。

そして、僕は彼の肩に手を置いた。

ゆっくりと息を吐き、そっと力を込めると、微かな抵抗の後に僕の手は温もりを忘れた。

#### 4（後書き）

どうも、水野です。

これと同時にエピソードも投稿しますので、そちらをすぐに読むことをオススメいたします。

## 5 (前書き)

エピソードです。

今回は当たり前ですがグロなし。

三連休の最終日、僕は昼間から隣県のショッピングモールで神山さんと過ごしていた。本来なら陽が落ちるまで温かい布団の中で惰眠を貪っていたかったのだが、そのささやかな楽しみはチャイムと姉がドアをノックする音で儚くも消え去ってしまったのだ。

目を擦りつつドアを開けると、私服姿の神山さんが立っていた。第一声で「今度こそ件くだんのショッピングモールに行こう」と口にした彼女をそのままに、僕は静かにドアを閉めた。全てが終わってから公園で僕の膝の上で目を覚まし、遅い時間だったのでそのまま帰ることにした彼女とは違い、もはや死体の欠片さえ無いであろう場所に僕は興味が無かった。

しかしその数時間後、僕はなぜか彼女と並んで出店のケバブに齧かじりついていた。それは、インターホンの前に佇たたずむ彼女が捨てられた仔犬のような表情を浮かべていたからなのかもしれないし、それを見た姉にけたぐり廻されるのを恐れたからかもしれない。だが、決定打となったのは、やはり彼女に起こる奇特な出来事を心のどこかで期待し、渴望していたからに違いなかった。

僕は彼女の赴くままに映画館や露店を見て回り、彼女のよく変わる表情を傍らで眺めていた。希望を聞かれた僕が最新のスプラッタ映画を提案した後、彼女はしばし思案顔になってから満面の笑みを浮かべて頷いたり、あまりに充実した内容に青くなつて僕の腕にしがみついたり、それを指摘すると赤くなって飛びのいたり、モニートンで統一された僕の服装を選びなおそうと眉根を寄せて色違いのジャケットを見比べていたりした。

歩き疲れた僕が休憩を申し出ると、彼女は快く承諾し、スムーズで評判だという店へと小走りに駆けていった。傍らに朝から着ていた服の入った紙袋を置き、ベンチに足を投げ出すように腰掛けた僕は、淡い橙色から紺色へと移り変わっていく空を眺めた。

流れていく雲をいくつか見送った時、近くに展示されていたテレビは青いビニールシートを一面に映した。どうやらニュース番組に替わったらしく、覚えのある景色と共に有名人とのスキャンダルで鳴りを潜めていたキヤスターの解説が入った。

テロップには数日前に受け取った名刺と同じ名前が書かれていた。僕と神山さんの出会った堺田は、どうやら巷を賑わせている連続殺人事件の四人目の被害者として認定されたらしく、事件がまたも進展を見せたと発表があった。

僕は、紙袋の底から小さなディスクを取り出し、光にかざした。虹色の光が反射し、僕の腕を照らした。

キヤスターは警察からの情報を淡々と読み上げていく。四肢は切り落とされていたものの、現場に残され、更に凶器である電動鋸も押収された。死因は失血死と断定され、遺品の中の免許証及び書類等から身元が判明したらしかった。

それは全て僕の手元にありますよ。

そう僕が口にする前に、目の前に透明な容器に入ったスムーズーが突き出された。

「はい、これ。グレープでいいかな？」

奢りだという彼女に礼を言い、紫色の液体を口に流し込むと、甘さと冷たさが溶けていくのを感じた。

再びテレビに目を向けると、既に画面は移り変わっていた。

僕は隣に座りスムーズーに夢中になっている彼女を盗み見ながら、翌朝のニュースで変えられない事実を知った彼女がどう反応を起すのだろうかという一人想像した。それをこの目で見られないことは残念でもあったが、それ以上の収穫はあった。

静かな観察は彼女が飲み終えるまで続き、それから彼女は僕の手を引き色々な店を回った。

冷やかして入った宝石店で、彼女は僕の選んだブラックダイヤのネックレスを首元に当ててみせ、「どうかな？」と僕に尋ねた。

僕が彼女に似合っていると告げると、彼女はどうやら機嫌を良く

したようだった。

浮かべた軽薄な笑みの裏で、僕は堺田の言葉を思い出していた。

「好意を抱いているのか」と、あの時彼は僕に尋ねた。

彼女の首に提げられた黒い宝石を覗き込む。そこに映った自分の暗い瞳を見つめながら、僕は思うのだ。

確かに、僕は好意　　いや、恋をしているのかもしれない。

神山桜かのじよの死を見つけるその大きな瞳も、死を探し当てるその白い指も、死へと導くその細い足も、僕にはとても魅力的なのだから。

## 5（後書き）

頑張りました。

説明でも淡々としたつもりなのですが、どうですか？

感想、評価はどんな些細なことでもいいのでお待ちしてます。

ちゃんと説明できてたかが心配です。

っていうか辻褄あってますよね？ね？

原作汚してないかととても不安でございます。

今回はコレとは別の作品（予定ではそろそろの修正）をやるうかと思っています。

ブログで進行状況やオススメの本を書いてますので、そちらを御覧くださいな。

追加修正は修正点を発見次第やっていきます。

以前から告知してあったプロットは、自前のHPにて掲載&解説予定です。現在のページは改修しますので、しばらく見れないかも分からないです。

なるべく早目に終えたいと思いますので、その時はよろしくお願い

します。

では、次回作でまたお会いしましょう。  
水野でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6813f/>

---

GOTH 2

2010年10月8日14時23分発行